

## 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

樋口 俊作

### 【要約】

日本陸軍の騎兵は、昭和 16 (1941) 年に戦車兵と統合されて機甲兵となった。約 70 年続き、日本陸軍の中で一定の役割を担っていた騎兵を、なぜ廃止することができたのか。この問いを戦い方の面から考察した。

騎兵の役割は搜索、警戒、挺進行動、戦闘などであった。明治期にこれらの役割は具体化され、その廃止までこれらの役割に変化は無かった。

騎兵は自らを「機動戦闘兵種」と呼んでおり、その特性を機動力と独立した戦闘力においていた。しかし、その実態は「馬に乗る兵種」と考えていた傾向が見られる。

大正期以降に航空機と、戦車を初めとした機械化、装甲化された兵器が台頭してきた。航空機は搜索の役割を騎兵と分割する形で担うようになる。また、航空機は騎兵による挺進行動の重要性を低下させた。戦車は、日本軍において当初、歩兵直接支援という役割で採用された。そして、戦車はその後の研究や実戦での活躍により、「機動戦闘兵種」のような地位も築こうとしていた。

このように航空機や戦車などは騎兵の重要度を低下させた。しかし、昭和 10 年代半ば (1940 年頃) において、これらはまだ運用方法や数量などの面で発展途上にあり、騎兵を不要にするほどのものではなかった。

航空機や戦車などが発展していくのに対して、騎兵の発展は限定的であった。19 世紀半ば以降の科学技術の発展に伴う戦場の火力の発達、機動戦闘兵種としての騎兵の特性の発揮を困難にしていた。騎兵の特性を再獲得するためには、馬で搬送できる以上の火力の強化と重装備化、つまり機械化が必要であった。ただし、騎兵は機械化という答えにすぐに行き着いたわけではない。『偕行社記事』や『騎兵教育ノ参考』上には、騎兵はどうあるべきか、そもそも騎兵は必要かといった議論が明治期以来、長い間展開されている。

昭和 10 (1935) 年頃から騎兵のあり方に関する論争に画期が訪れる。それまでの議論は騎兵を「馬に乗る兵種」と位置づけて行われていたが、この頃を境に「機動兵種」という位置づけに捉えなおす内容の議論へ変化している。これは騎兵の伝統の再解釈でもあり、騎兵は自らの伝統を機甲でも通用する形で捉えなおすことができた。

騎兵は機動戦闘兵種としての自らの位置づけと現実の環境の間に葛藤を抱えており、これを解決できるのは機械化のみであったこと、機甲部隊の戦闘は本質的に騎兵戦闘と変わらないと

解釈できたこと、そして、これらの内容が誌上の議論で騎兵内に知られていたことが騎兵の廃止を可能にした主な理由であったと考えられる。

はじめに

明治4(1871)年に御親兵から始まった日本陸軍の騎兵は、昭和16(1941)年、対米英戦の開始に先立って廃止され、戦車兵と統合されて機甲兵となった<sup>1</sup>。日本陸軍には歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵等の兵種があり、時代を追って航空兵が追加される等の変化があった。また、これらの兵種にはそれぞれに役割があった。騎兵の歴史を記述した『日本騎兵史<sup>2</sup>』では、騎兵の役割は捜索、警戒、通信・連絡、挺進行動、戦闘であったとされている<sup>3</sup>。

先行研究では、日本での戦車の発展や日本軍の機械化の過程の一部として、騎兵の廃止を扱っているものが多い。騎兵の廃止が機甲本部の設立とつながっており、騎兵と戦車兵が合一して機甲兵となったからである。加登川幸太郎は、機甲部隊発展の視点から、日本の騎兵は馬から下りようとせず、鞍にしがみついているうちに軍近代化の外におかれていたが<sup>4</sup>、騎兵監吉田恵中將による意見具申や騎兵界に対する説得、陸軍省と参謀本部内におけるノモンハン事件に関する検討を経て機甲本部設立につながったとしている<sup>5</sup>。また、葛原和三は、機甲戦術思想発展の観点から騎兵の位置づけに触れている。葛原は、騎兵は機械化に関心を持ちつつも騎馬を捨てきれずにいたところ、吉田の号令による騎馬の放擲と機甲兵種創設の意見具申があったこと、この号令がノモンハン事件と欧州でのドイツ軍の西方電撃戦の追い風を受けたことで、機甲兵種が創設されたとしている<sup>6</sup>。

このように、日本陸軍の機械化の流れの中における騎兵の位置づけは先行研究によって明らかになっている。しかし、ノモンハン事件やドイツ軍の電撃戦の影響があったとはいえ、騎兵監の意見だけで、70年の伝統を誇り、日本陸軍の戦い方の中で一定の役割を担っていた騎兵を廃止することができるだろうか。兵種を廃止するためには、その兵種が果たしていた役割自体が不要になるか、またはその役割を別の兵種で代替できるようになることが必要であり、かつ、兵種の伝統に対する何らかの考慮が必要となるはずである。筆者は昭和16(1941)年の騎兵廃止までに、それを受け入れる土壌が日本軍及び騎兵の中に醸成されていたのではないかと考え

<sup>1</sup> 本稿では、騎兵監部が廃止された昭和16(1941)年4月を日本陸軍の騎兵の廃止時期としている。付言すると、日本陸軍の兵科区分は昭和15(1940)年9月に撤廃されており、また、「騎兵」の名称を有する部隊は昭和20(1945)年の終戦まで残存している。

<sup>2</sup> 佐久間亮三、平井卯輔編『日本騎兵史』上・下巻(萌黄会、1963年)。

<sup>3</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』上巻、206-208頁。

<sup>4</sup> 加登川幸太郎『戦車 理論と兵器』(圭文社、1977年)124頁。

<sup>5</sup> 加登川幸太郎『帝国陸軍機甲部隊』(白金書房、1974年)169-172頁。

<sup>6</sup> 葛原和三『機甲戦 用兵思想と系譜』(作品社、2021年)131-152頁。

る。

本稿は日本陸軍における騎兵の役割及び特性を中心に考察し、戦場の環境や他兵種との関係が変化の中で、最終的に騎兵を廃止することが可能となった背景を明らかにするものである。そうすることにより、機能部隊の廃止・改編に関して一つのモデルケースを提示できるものと思料する。

なお、本稿ではまず『日本騎兵史』及び先行研究を参照しつつ、各種典令範及び同解説資料の記述の変化を追うことで、騎兵の役割と特性を明らかにした。次いで関係兵種の発展の推移を追うことで、これらが日本陸軍の戦い方及び騎兵の役割にどのような影響を与えたかを明らかにした。さらに騎兵のあり方に関する時代毎の日本陸軍内の考え方について、『偕行社記事』等の機関誌上の議論を追った上で、最後に騎兵の廃止を可能にした背景について考察を加えた。

冒頭で騎兵の役割が搜索、警戒、通信・連絡、挺進行動、戦闘であったと述べたが、このうち通信・連絡の役割は兵種としてではなく乗馬伝令としての色合いが濃いため、本稿では扱わない。

引用文との関係上、「役割」を「任務」「用途」「要務」と記載している個所があるが、同じ意味で用いる。同様に、騎兵の「本領」と騎兵の「特性」も同義語として用いる。また、引用に当たり、旧字体の漢字は新字体に変換した。

### 1 前史 19世紀の欧州騎兵

明治の建軍時、日本陸軍は当初フランスに、ヤーコブ・メッケル (Klemens Wilhelm Jacob Meckel) 少佐の来日前後からドイツにその範を求めている。日本陸軍の騎兵が発展していく経緯を述べる前に、範とした18世紀末～19世紀中期の欧州の騎兵の種類と装備、編成について『日本騎兵史』、『戦闘戦術の歴史<sup>7</sup>』を参考にして、簡単に述べる。

『日本騎兵史』では18世紀末から19世紀初期のナポレオン1世 (Napoléon Bonaparte) 時代を騎兵の全盛期としている。当時、騎兵は決戦兵種であった。その役割は偵察、襲撃、敵軍が行う偵察に対する自軍の遮蔽、追撃等であったが、その中でも白兵襲撃に重点が置かれていた。多岐にわたる役割に対応するため、騎兵は特性に応じていくつかの種類に分かれていた。具体的には槍騎兵、胸甲騎兵、竜騎兵、驃騎兵等があったが、大別して2種類に区分することができる。一つは重騎兵であり、主な役割は襲撃であった。19世紀初期のナポレオン戦争頃の重騎兵の襲撃要領は、乗馬のまま槍や剣を構えて敵にぶつかるものであった。後述するように

---

<sup>7</sup> ロバート・B・ブルース、イアン・ディッキー、ケヴィン・キーリー、マイケル・F・バヴコヴィック、フレデリック・C・シュネイ著、浅野明監修、野下祥子訳『戦闘戦術の歴史—ナポレオンの時代—』4 (創元社、2013年) 93-161頁。

19世紀末以降、戦場において火力が増大してくると、歩兵に対して騎兵が正面から戦うのは困難になるが、19世紀半ばまでは騎兵も十分に歩兵と戦うことができた。

騎兵の種類のもう一つは軽騎兵であり、偵察や遮蔽等の役割を負っていた。軽騎兵は重騎兵に比して小型の馬に乗っており、胸甲（鎧の一種）を装着しない等、装備も軽量であった。追撃は重騎兵と軽騎兵の両方が行うことがあったが、軽騎兵の方が有利であったようである。19世紀末頃から20世紀初期にかけて戦場の火力の影響が増大してくると、重騎兵は軽騎兵に統合される形で姿を消すことになるが、日本陸軍が建設された頃の欧州にはまだ上記の2種類の騎兵が存在した。

騎兵個人の武器は槍や剣に加えて、拳銃や騎兵銃を装備していた。しかし、騎兵の主武装はあくまで槍や剣であった。これは連発銃や後装式の銃が発明されていない19世紀初期に限ったことではなく、少なくとも第一次世界大戦の初期までは、騎兵は槍や剣を主に使っていたし、乗馬騎兵が少なくなった第二次世界大戦においても引き続き槍や剣等の白兵用武器を装備していた。騎兵部隊の火力としては、牽引式の大砲である騎砲や機関砲があった。これらを使用するためには槍や剣で戦う主力の騎兵部隊とは別に部隊を編成する必要があった。

編成は国や時期によって様々である。19世紀初期、ナポレオン1世は一つの軍団を1~4個の歩兵師団と1個の騎兵師団または旅団で編成していたほか、軍団に所属しない独立した騎兵集団を編成した。1870年、普仏戦争時のプロイセンも同様に、一つの軍団の中に歩兵師団と複数の騎兵師団または旅団を編成したほか、軍団から独立した直轄騎兵師団も編成していた。

日本陸軍がその範を当初フランスとしたのは、フランス軍が欧州で最も優れていると考えていたからである。その一方で、ナポレオン戦争後から普仏戦争までに欧州で騎兵が活躍した有名な戦例は、イギリス騎兵のバラクラヴァの戦い（1854年）があるのみで、フランス騎兵の活躍例は管見の限り見当たらない。

なお、19世紀初期から中期にかけての軍事技術に関する一般的な趨勢の一つに、後装式の銃や砲の採用がある。また、実戦での運用は芳しくなかったものの、フランス軍では機関銃の原型であるミトラユーズ砲も開発された。こうした技術の進展は、銃砲の射程の延伸や発射速度の向上をもたらし、白兵戦を主戦闘方法とする騎兵の活動を阻害する要素となった。

19世紀初期には決戦兵種であった騎兵は、戦場の環境の変化に応じて、主な役割を襲撃から搜索中心のものに変化させ、20世紀にかけて衰退していくことになるが、先述したとおり、19世紀半ばにおいてはまだ騎兵も戦場で活躍し得た。

### 2 日本陸軍における騎兵の役割と特性

#### (1) 騎兵の基本的な役割の形成

ここではまず、日本陸軍の騎兵の役割とその形成過程を述べる。大正期以降、航空や戦車といった新兵器が騎兵の役割に影響を及ぼしていくことになるが、これらの兵器の本格的な導入に先立って、明治期末までには騎兵の基本的な役割が形成されている。

##### a 日露戦争前まで

建軍から日清戦争までは、日本陸軍の騎兵は揺籃時代にあり、混沌としていたと『日本騎兵史』に表現されている<sup>8</sup>。その理由として、建軍に当たり日本陸軍が当初範をとったフランス軍は、当時、騎兵が不振であったため、騎兵に対する熱意が薄かったこと、日本国民一般として馬に対する関心が低かったこと、建軍の重点が歩砲兵に置かれ、騎兵は第二義的に見られていたこと等が挙げられている<sup>9</sup>。

そのような中でも日本陸軍は、日清戦争以前から搜索のために騎兵を使用するという認識は有していたようである。日清戦争前の明治 24 (1891) 年版「野外要務令」では「第三篇 搜索勤務」において「第五十一 搜索勤務ハ概ネ騎兵ノ専任スル所ナリ<sup>10</sup>」「第五十二 敵ト遠隔スルノ大ナルトキハ搜索勤務ハ専ラ騎兵ヲシテ独立シテ其任ニ當ラシムヘシ<sup>11</sup>」と記載されており、騎兵を搜索に使うことが示されている。

日清戦争前の騎兵の教範は、明治 4 (1871) 年にフランス人教師の口述を翻訳した「騎兵教授書」を皮切りに、逐次改訂、発布されていた。日清戦争の時点では明治 24 (1891) 年版「騎兵操典」が最新のものである。『日本騎兵史』はこれを「わが国初めての騎兵操典とみるべきものである<sup>12</sup>」と評価した上で、「騎兵の本質、使命を明示した綱領はなく、(中略) いわば教練書で戦術書とみられるような点は極めて少な<sup>13</sup>」かったとしている。

日清戦争における日本陸軍の騎兵の代表的な運用としては、騎兵第 1 大隊を基幹とした部隊(大隊長：秋山好古少佐)による、旅順要塞の搜索が挙げられる。この搜索は第 2 軍による旅順攻略の成功に寄与している。なお、日清戦争当時の騎兵部隊は各師団内の騎兵大隊のみで、第 1 節で述べたような独立した直轄騎兵は、編制上、存在しなかった。そこで、現場での判断

<sup>8</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』上巻、407 頁。

<sup>9</sup> 同上、47-49、82 頁。

<sup>10</sup> 陸軍省「野外要務令」(1891 年) 防衛研究所所蔵、53 頁。

<sup>11</sup> 同上。

<sup>12</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』上巻、426 頁。

<sup>13</sup> 同上。

により各師団内騎兵部隊をまとめることによって、軍直轄の騎兵隊として使用したのである。日清戦争終了後、師団騎兵とは別に、独立した騎兵部隊として騎兵旅団が整備されている。

日清戦争後、明治30(1897)年に当時の乗馬学校長であった秋山が、「本邦騎兵用法論」を著し、日本の騎兵のあり方を述べた。その内容は多岐にわたるが、本稿に関係する部分を整理すると以下のとおりである。

- ・騎兵の用途は搜索勤務、警戒勤務、騎兵戦闘、挺進騎兵である。
- ・騎兵使用上の目的は、軍主力の作戦に先立ち、作戦地域を専制することが第一の要務であり、軍主力同士の戦闘に参加するのは特別の場合である。作戦地域の専制のためには、敵騎兵を撃破することが必要である。これにより、敵より早く情報を収集でき、敵に対しては自軍の遮蔽ができる。
- ・騎兵は敵の作戦計画を妨害するため、敵の動員を妨害、倉庫を焼夷、電信を切断、鉄道を破壊して、これらをもって全軍の勝利に寄与すべきである。
- ・諸外国の騎兵には様々な種類が存在するが、日本の騎兵は軽騎兵一種類のみとし、これに各種騎兵の役割を持たせるべきである<sup>14</sup>。

その後、明治33(1900)年版「野外要務令」では「搜索勤務」の中に「第五十五(中略)我軍ノ側面ヲ警戒シ及敵軍ノ側面ヲ搜索シ殊ニ奇襲ニ対シ我砲兵ヲ警戒スルハ該騎兵ノ主要ナル任務トス<sup>15</sup>」として騎兵に対して警戒の役割が加えられている。記載箇所が「搜索勤務」であることを見てもわかるとおり、騎兵の行う警戒とは、自軍主力の周囲を搜索して敵がいなかったことを確認する等、あくまで搜索と表裏一帯の関係にある。

### b 日露戦争以降

明治37(1904)年に日露戦争が勃発した。日露戦争における日本陸軍の騎兵の運用例は数多くあるので、ここでは役割ごとに代表的なものを挙げる。まず搜索であるが、軍が行動する際は恒常的に騎兵の搜索が行われている。特に日露戦争の陸戦の緒戦は、定州における近衛騎兵連隊による搜索中に生起している。この搜索は、第1軍の架橋の掩護のために行われたものであり、その行動は警戒に区分することもできるだろう。

側面の警戒としては、騎兵第1旅団を基幹とする秋山支隊による、奉天会戦における第3軍の側面掩護が挙げられる。第3軍は満州軍主力の左翼からロシア軍の側背を攻撃した。この時、秋山支隊は第3軍のさらに左翼に展開して、その掩護にあたった。このためロシア軍は第3軍

<sup>14</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』上巻、449-470頁。

<sup>15</sup> 陸軍省「野外要務令」(1900年)防衛研究所所蔵、61-62頁。

## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

の所在を確認できず、予備隊の運用に支障をきたしている。これは側面警戒であると同時に、遮蔽でもあった。

敵側面への脅威としては、沙河会戦前に騎兵第2旅団により行われた本溪湖の戦いが挙げられる。第1軍の右側面を防護していた本溪湖守備隊をロシア軍騎兵が攻撃していたところ、騎兵第2旅団はさらにその側面からロシア軍騎兵を攻撃して、その攻撃を頓挫させている。

追撃に関しては特筆できる成功例はないように見える。追撃に運用するという発想がなかったわけではなく、その余力がなかったのが実情のようである。例えば奉天会戦では日本軍が奉天を奪取した後、秋山支隊により追撃が行われたが、ロシア軍の妨害によりその企図を達成できなかった。

挺進行動では長沼挺進隊と長谷川挺進隊（いずれも複数連隊から選抜された2個中隊規模）が有名であり、敵後方の鉄道や倉庫の破壊を行っている。この他にも戦略搜索を目的とした挺進行動として有名なものに、建川将校斥候と山内将校斥候（いずれも10名以下の規模）がある。両斥候の搜索は奉天におけるロシア軍の企図の解明に寄与している。このように、日露戦争では騎兵の基本的な役割のほとんどを確認することができる。

日露戦争後、明治42（1909）年に「歩兵操典」が發布された。この「歩兵操典」には、歩兵が軍の主兵であること、そして、歩兵を中心として諸兵種の協同動作が規定されることが示された<sup>16</sup>。つまり、それまで相互の関係が薄かった各兵科の操典が、「歩兵操典」を中心に体系づけられることになった。同「歩兵操典」における騎兵の用途は、「第二部 戦闘ノ原則」に「第一 戦闘ハ通常前方ニ在ル騎兵ノ接敵ヲ以テ起」るものとして、戦闘前には自軍主力の前方で使用し、戦闘中には「第二十一（中略）騎兵ハ敵ノ側背ヲ脅威スル」とされている。

「歩兵操典」の改訂を受け、明治45（1912）年に「騎兵操典」が改訂發布されている。本操典には「綱領」が設けられ、その「第一」に騎兵の用途が記載されている。その要点のみを述べると、会戦前は敵騎兵を撃破して行動の自由を得て諸種の情報を収集すること、会戦中は他兵種と協同すること、終局には敵を追撃または逆襲することとされている<sup>17</sup>。

挺進行動に関する記述が典令範に現れるのは大正15（1926）年版「騎兵操典草案」であるが、すでに先述の「本邦騎兵用法論」で秋山が挺進騎兵に言及しており、実際に日露戦争でも騎兵の挺進による活躍例があるため、役割の一つとして認識されていたと考えてよいだろう<sup>18</sup>。

このように日本陸軍における騎兵の基本的な役割は明治期末までに確立されている。これらの役割は第1節で見た欧州の騎兵の役割とほぼ同様のものであり、日本独特と呼べるようなも

<sup>16</sup> 教育総監部第一課「歩兵操典ニ関スル訓示及講話筆記」明治四三年三月坤『貳大日記』防衛研究所蔵。

<sup>17</sup> 陸軍省「騎兵操典」（1912年）防衛研究所蔵、1頁。

<sup>18</sup> 萌黄会編「騎兵太平記」『偕行』367号（1981年7月）10頁によれば、「本邦騎兵用法論」は当時の全騎兵部隊に配布されている。

のは見受けられない。その一方で、日本陸軍の騎兵には決戦兵種時代がなく、最初から搜索を中心に運用されたという点が特徴といえる。なお、各操典の綱領のうち、役割と特性に関する記述を一表にして末尾に付した。騎兵操典が改訂される度に綱領の記述は変化しているものの、基本的な役割は明治45（1912）年版のものを継承していると見てよいだろう。

### （2） 騎兵の特性

ここまで騎兵の役割を確認してきたが、騎兵にはどのような特性があって、こうした役割を与えられていたのだろうか。騎兵の特性が典令範に示されたのは大正11（1922）年版「騎兵操典草案」からである。その「綱領」には「騎兵ノ本領ハ軽快ナル機動性ト独立セル戦闘能力トヲ以テ其任務ヲ達成スルニ在リ而シテ其戦闘目的ヲ達スル為乗馬戦又ハ徒歩戦ヲ用ヒ或ハ之ヲ併用ス<sup>19</sup>」と記載されており、歩兵等の一般部隊よりも高い機動性<sup>20</sup>を有し、主力部隊からある程度独立して戦闘できることが特性として挙げられている。そして、このような特性を有する騎兵を、日本陸軍内部では「機動戦闘兵種」と当時呼んでいたようである。なお、『日本騎兵史』によれば、大正11（1922）年の草案発布以前においても、「騎兵が機動戦闘兵種であるという観念はもとより従来からあった<sup>21</sup>」が、この修正をもって「いよいよわが騎兵は機動戦闘兵種として訓練されるようになってきた<sup>22</sup>」とされている。ちなみに、機動戦闘兵種と位置づけられる前は、搜索のための兵種と考えられていたようである<sup>23</sup>。

この綱領の記述の変化について『典令範綱領義解』では、騎兵にはそれまで独立戦闘力がなかったが、騎兵の兵器の強化や部隊の配属によりその戦闘力の独立性が増したためと説明されている<sup>24</sup>。独立した戦闘能力の理想的な形とは、他部隊の支援がなくても戦闘できるということになるだろう。騎兵の戦闘力は、戦場における火力の増大に比して、相対的に低下してきていたため、かねてから騎兵の火力増強が要望されていた。先述の「本邦騎兵用法論」では騎砲兵（速射機関砲隊）を要望する意見<sup>25</sup>が記載されており、また、日露戦争における騎兵旅団も、現場における部隊の配属等により火力が強化されている。大正7（1918）年に一部の騎兵連隊に

19 陸軍省「騎兵操典」（1922年）防衛研究所所蔵、2頁。

20 山口義信『騎兵陣中勤務ノ着眼』（武揚堂書店、1933年）358頁によれば、「機動」とは「一般ニハ交戦ノ前後ニ於ケル軍隊ノ行フ戦略並戦術上ノ諸運動ヲ謂ヒ特ニ戦場ニ於ケル機動トハ例ヘハ各級指揮官カ其ノ特別ノ戦闘目的達成ノ為ニ行フ軽捷ナル兵力ノ移動並部署ヲ迅速ニ変更スル為ノ運動等ヲ謂フ」とされている。

21 佐久間、平井編『日本騎兵史』下巻、95頁。

22 佐久間、平井編『日本騎兵史』上巻、285頁。

23 同上、209頁。

24 齊藤市平『典令範綱領義解』（尚兵館、1941年）59-61頁。

25 佐久間、平井編『日本騎兵史』上巻、466頁。



## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

機関銃が装備されたほか、明治 42 (1909) 年と大正 9 (1920) 年にそれぞれ少数だが騎砲兵大隊<sup>26</sup>が編制化された。このように騎兵の戦闘力は大正中期までに逐次強化されている。

綱領の後半部分の、乗馬戦と徒歩戦を簡単に説明する。乗馬戦は第 1 節で説明した 19 世紀の欧州騎兵の戦闘方法と大差はなく、文字どおり乗馬したまま敵にぶつかっていく白兵戦であり、主な武器は軍刀であった。徒歩戦は下馬して歩兵と同じように戦闘するもので、主な武器は騎兵銃(小銃を騎兵用に改造したもの)であった。明治期末に騎兵銃に銃剣が装備されるが、これは乗馬戦の軍刀に代えるためのものではなく、徒歩戦で使用するためのものである。時代が下り、編制・装備が変化して、騎砲や機関砲等が使用できるようになっても、主体となる騎兵の行動は基本的にこの 2 種類であった。なお、乗馬のまま射撃する馬上射撃は、操典に実施要領の記載はあるが、効果に対する期待値は限定的であり<sup>27</sup>、『偕行社記事』にも命中効果はほとんどなく、敵に恐怖を与えて一時的に混乱させることができるだけだという研究記事がある<sup>28</sup>。また、日露戦争において乗馬戦で敵にぶつかる際に、軍刀の代わりに拳銃を使用した事例があり、かつ、これが有効であるという意見もあったが、典令範への反映は見られない<sup>29</sup>。

乗馬戦と徒歩戦の優先度は時代により変化している。先述の「本邦騎兵用法論」では、やむを得ない場合を除き、乗馬戦を行うべきであるとされている<sup>30</sup>。明治 45 (1912) 年版「騎兵操典」でも、引き続き騎兵の主戦闘方法は乗馬戦であるとされており<sup>31</sup>、徒歩戦に関する記述はほとんどない。騎兵の伝統的な戦い方といえば乗馬戦であり、第 4 節で述べるとおり、騎兵精神は乗馬戦に表れると騎兵内では考えられていた。しかし、伝統や精神的位置づけは別にして、大正 11 (1922) 年版「騎兵操典草案」以降は、戦場での運用や教育訓練上、乗馬戦と徒歩戦の重要度に差はなくなり、徒歩戦に関する典令範の記述量も次第に増えていった。乗馬戦では主力部隊はあくまで白兵戦を行うため、十分な火力を有する敵に対して乗馬戦を行うのは困難であった。その点で徒歩戦は、敵の火力に対する被弾面積の少なさや地形の利用による防護等に優れており、また、小銃を使用することで距離があっても敵を攻撃できることから、乗馬戦に比べて戦場における火力の発達への対応が容易であった。しかし、徒歩戦では馬の機動性を放棄することになり、騎兵の特性を発揮しづらいという葛藤があった。この葛藤の細部についても第 4 節で述べる。

<sup>26</sup> この時できた騎砲兵は編制上、砲兵に所属したが、運用時は騎兵に配属されることを前提とした部隊である。

<sup>27</sup> 陸軍省「騎兵操典」(1931 年) 防衛研究所所蔵、55 頁。

<sup>28</sup> 牧野熊彦「騎兵ノ徒歩戦及馬上射撃ノ価値」『偕行社記事』第 346 号 (1906 年 8 月) 13-19 頁。

<sup>29</sup> 萌黄会編「騎兵太平記」No. 14 『偕行』382 号 (1982 年 10 月) 20 頁。

<sup>30</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』上巻、464-465 頁。

<sup>31</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』下巻、55 頁。

### 3 他兵種の発展による影響

明治期を通じて日本陸軍の騎兵の役割が具体化されてきたが、明治期末から新兵器も逐次登場し、その後の騎兵の役割に影響を与えている。騎兵の役割に大きな影響を与えた新兵器として、飛行機と、戦車を初めとした機械化、装甲化された兵器が挙げられる。日本陸軍においてもこれらの兵器は、発展とともに部隊や兵科・兵種を形成し、日本陸軍の戦い方に影響を与えていった。

#### (1) 航空の発展

まず、飛行機等の重航空機と、気球等の軽航空機を含めた航空全般に関して述べる。動力を有する「飛行機」が登場するのは20世紀になってからであるが、気球の利用開始はもっと早く、日本陸軍においても明治期から使用されていた。日本軍は日露戦争における旅順攻略時、同港の偵察のために気球を使用している。しかし、日露戦争当時の気球隊は臨時編成のものであり、かつ、気球隊の戦闘における成果もあまり高く評価されていなかった<sup>32</sup>。日露戦争後に発布された明治40(1907)年版「野外要務令」でも「搜索勤務ハ概ネ騎兵ノ専任スル所ナリ<sup>33</sup>」となっている。気球による搜索に関しては「第三篇 搜索勤務」の末項に「第七十 搜索ノ為気球ヲ使用スルヲ利トスルコトアリ殊ニ要塞戦ニ於テ然リトス<sup>34</sup>」が加えられた程度である。その他に明治期の航空に関する事項として、明治36(1903)年のライト兄弟(Wilbur WrightとOrville Wright)の初飛行、明治42(1909)年の臨時軍用気球研究会の設置が挙げられるが、騎兵に与えた特筆すべき影響はなかった。このように、明治期は自軍主力のための搜索といえは騎兵の専任であった。

大正期から昭和期にかけて、日本陸軍においても航空に関する著しい発展が見られる。大正元(1912)年には所沢付近での大演習に飛行機が参加している。第一次世界大戦は飛行機が戦争で本格的に実用化されたことでも知られる。日本軍でも、飛行隊が大正3(1914)年の青島攻略に参加して、偵察、爆撃、空中戦等を実施した事例がある<sup>35</sup>。

機能別の視点から典令範の記述を見ると、開戦直前に発布された大正3(1914)年版「陣中要務令」では、搜索における航空機の利用価値が高いことが記載されている。例えば、「第三篇

<sup>32</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用<1>—昭和十三年初期まで—』(朝雲新聞社、1971年)7-11頁。

<sup>33</sup> 陸軍省「野外要務令」(1907年)防衛研究所所蔵、64頁。

<sup>34</sup> 同上、73頁。

<sup>35</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用<1>』27-52頁。

## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

搜索及諜報勤務」に「第六十七 (中略) 航空機ハ搜索勤務上偉功ヲ奏スルコトアリ<sup>36</sup>」や「第九十八 (中略) 航空機ハ他ノ使用ヲ許ササル場合ニ於テモ亦能ク之ヲ使用シ搜索ノ目的ヲ達シ得ル (中略) 就中飛行機ハ最モ迅速ニ情報ヲ得ルニ適<sup>37</sup>」している等である。この時点の搜索勤務についてはまだ、「搜索勤務ハ主トシテ騎兵ノ任スル所ナリ<sup>38</sup>」となっていたが、戦争終結後の大正 13 (1924) 年版「陣中要務令」では「第七十六 搜索ハ航空隊、騎兵及其外ノ兵種ノ任スル所<sup>39</sup>」「第七十八 遠距離搜索ハ (中略) 専ラ飛行隊及騎兵ノ任スル所ナリ<sup>40</sup>」「第七十九 近距離搜索ハ (中略) 先ツ航空隊及騎兵之ニ任ス<sup>41</sup>」となり、搜索上の航空機の役割が大幅に大きくなり、騎兵の役割が相対的に小さくなっている。

さて、大正 11 (1922) 年から軍縮が行われており、騎兵も規模が縮小されている。しかし、航空は軍縮の対象外とされており、大正 14 (1925) 年に航空は兵科として独立する等、制度や編制面でも発展が見られる。このように航空の価値は向上していったとはいえ、航空用兵思想の発展は決して円滑に行われていったわけではない。航空用兵思想に関しては、その重点が地上作戦協力にあるのか、航空撃滅戦にあるのかという確執と推移があったことが先行研究で明らかになっている<sup>42</sup>。つまり、航空担当部署と地上軍のそれぞれが考える航空用兵は必ずしも一貫していなかった。ここではあくまで騎兵の役割に影響を及ぼした事項に限って、まず航空担当部署内部の思想の発展を、続いて陸軍全体における航空の位置づけの推移を確認していく。

まず、航空担当部署内部の思想の発展についてである。公式の典令範とは異なるが、昭和 3 (1928) 年版「統帥綱領」以前の航空用兵研究で特筆されるものとして、横山久幸は大正 11 (1922) 年の「航空部隊用法ニ関スル一般原則」を挙げている<sup>43</sup>。この段階の航空運用の重点は地上作戦協力にあった。その「綱領」では「搜索ハ騎兵及飛行隊ノ担任スル所トス<sup>44</sup>」とされ、両者の能力の長短と特性を考慮して連携するよう留意することが述べられている。また、空中搜索の特性として、敵情を迅速に得られる一方で、航空部隊の兵力、天候やその他の障害によって継続的な搜索を行えないことや敵が秘匿欺騙し易いこと<sup>45</sup>が挙げられている。

会戦前の騎兵の搜索は、敵騎兵を撃破することを手段としており、これによって警戒や遮蔽を同時に達成しようとしていることは先に触れたとおりである。「航空部隊用法ニ関スル一般原

<sup>36</sup> 陸軍省「陣中要務令」(1914年)防衛研究所所蔵、22頁。

<sup>37</sup> 同上、28頁。

<sup>38</sup> 同上、22頁。

<sup>39</sup> 陸軍省「陣中要務令」(1924年)防衛研究所所蔵、54頁。

<sup>40</sup> 同上、55頁。

<sup>41</sup> 同上、56頁。

<sup>42</sup> 横山久幸「日本陸軍におけるエア・パワーの発展とその限界—運用規範書を中心に—」『戦史研究年報』第7号(防衛研究所、2004年3月)1-21頁。

<sup>43</sup> 同上、3頁。

<sup>44</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用<1>』210頁。

<sup>45</sup> 同上、210-211頁。

則」ではこの遮蔽を含む航空の機能として、「敵ノ空中行動ヲ妨害センニハ制空権ノ獲得ヲ必要トス<sup>46</sup>」とし、戦闘に当たっては「戦闘隊ヲシテ兵力使用ノ重点ヲ友軍上空ニ置カシメ以テ敵機ノ空中行動ヲ阻害セシムル」として、上空の掩護に関する事項が述べられている。さらに、軽爆撃隊を「要スレハ騎兵集団ノ戦闘ニ参加セシムルコトアリ」として、地上の騎兵に協力させることも記されている。それまで敵の脅威は地上のものだけであったが、敵も空を利用するようになったことから、警戒、あるいは遮蔽は騎兵だけでは達成できなくなった。

爆撃に関する記述は他にもあり、軽爆撃機隊を敵軍の集中妨害に使用することや、重爆撃機隊を敵飛行場、交通設備及び軍事諸施設の破壊や軍需品の湮滅に使用することが挙げられている<sup>47</sup>。それまで敵軍の後方に所在する倉庫や鉄道といった施設の破壊は、例えば日露戦争での長沼挺進隊や長谷川挺進隊に代表されるように、騎兵の挺進行動に期待されるところが大きかった。しかし、飛行機による空からの破壊という手段が具体化されていくことにより、騎兵の挺進行動の重要度は相対的に低下していったといえるだろう。

その後、騎兵の廃止までに、航空用兵思想は昭和9(1934)年「航空兵操典」、昭和12(1937)年「航空部隊用法」、昭和15(1940)年「航空作戦綱要」と変化し、これらに記載された航空用兵の重点も逐次変化したが、航空撃滅戦に重点が置かれたものであっても、航空から搜索や爆撃の任務がなくなることはなかった。なお、「航空作戦綱要」では空中挺進に関する事項も登場している<sup>48</sup>。落下傘部隊の誕生は昭和16(1941)年11月の挺進第1連隊の編成まで待たねばならなかったが、昭和15(1940)年12月には落下傘部隊に関する調査・研究を行う浜松陸軍飛行学校練習部が誕生しており、騎兵の挺進行動の重要性は一層低くなったものと考えられる。

続いて、日本陸軍全体の中における航空の位置づけを確認する。日本陸軍の用兵上の最高規範であり、方面軍及び軍の統帥について記載された「統帥綱領」が大正3(1914)年に編纂され、昭和3(1928)年までに数度の改訂が行われている。『戦史叢書』によれば、昭和3年版「統帥綱領」における航空用法では、地上戦闘参加、特に搜索、指揮連絡に重点が置かれた<sup>49</sup>とされている。ここでは搜索を中心にその内容を確認する。昭和3(1928)年版「統帥綱領」上の搜索における航空と騎兵のバランスは、「第三 作戦軍ノ編組」において「25 搜索ハ主トシテ航空部隊及ビ騎兵ノ任ズル所トス<sup>50</sup>」として両者を状況に合わせて連携させるようになっている。比較のために大正7(1920)年版の記述を参照すると、「五十 搜索ハ主トシテ騎兵及航空隊ノ

<sup>46</sup> 同上、211頁。

<sup>47</sup> 同上、215頁。

<sup>48</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用<2>』（朝雲新聞社、1974年）223頁。

<sup>49</sup> 同上、291頁。

<sup>50</sup> 参謀本部、陸軍大学校『統帥綱領・統帥参考』（偕行社、1962年）549頁。本書は戦後の復刻資料である。

## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

担任スル所トス<sup>51</sup>」とされている。騎兵と航空の連携が必要であることは変化がないものの、大正7（1920）年版と昭和3（1928）年版では騎兵と航空部隊の記述順序が逆転し、その重要度が変化していることが分かる。

「統帥綱領」を教育するために編纂された「統帥参考」では、遠距離や戦略搜索に関しては「八十八 方面軍統帥指揮ノ為騎兵搜索ノ価値ハ（中略）大ナラス戦争間主要ナル戦略的情報ノ大部分ハ概ネ航空部隊、諜報機関等ノ提供シタルモノナリ<sup>52</sup>」「八十九 敵ト遠隔セル時期ニ於ケル広大ナル地域ニ亘ル戦略搜索ハ主トシテ飛行隊ヲシテ之ニ任セシムルヲ可トス<sup>53</sup>」と記載されており、搜索における騎兵の価値が低下し、航空部隊の価値が高くなっていることが伺える。

昭和3（1928）年版「統帥綱領」の作戦に関する記述を時系列で見ると、軍主力の機動中には飛行隊と騎兵部隊のそれぞれが搜索を行うことが記載されている<sup>54</sup>。この記述の範囲では搜索上の航空と騎兵の関係や重点配分は読み取れない。続いて戦闘中と追撃中は飛行隊をもって所要の搜索を行うことが記載されている一方で、騎兵に関しては搜索の記述はない。第2節で述べたとおり、もともと騎兵の搜索は会戦前に行うものであり、会戦中の騎兵の役割は搜索ではなく、自軍主力の側背警戒や敵の擾乱、追撃等を行うものとされていた。したがって、騎兵の記述に搜索がないのは、戦闘中と追撃中における搜索を担う部隊が騎兵から航空へ移行したことを示しているのではなく、軍にもともとなかった機能、あるいは特定の部隊が行うようになっていなかった機能を、航空の登場により獲得したことを示していると考えられる。

「統帥参考」では作戦の各段階における搜索について、「九十 会戦機動及戦闘間ニ於テ方面軍司令官ハ常ニ少クモ一部ノ偵察飛行隊ヲ直轄使用シテ敵情ノ搜索、我軍状態ノ視察ヲ行ハシメ騎兵集団ヲシテ所要ノ搜索ヲ行ヒ（中略）軍司令官ハ偵察飛行隊ノ外其騎兵時トシテ装甲部隊ヲシテ所要ノ搜索ニ任セシメ<sup>55</sup>」と記載されており、飛行機にやや比重があるように見受けられるものの、搜索に航空と騎兵を併用するようになっている。

師団以下の運用では、搜索に関して、両者の用途の分けを行おうとしていることが確認できる。昭和13年（1938）版「作戦要務令」では、「第七十七 遠距離搜索ハ（中略）通常飛行機時トシテ騎兵、機械化部隊等之ニ任ズルモノトス<sup>56</sup>」、「第七十八 近距離搜索ハ（中略）先ヅ騎兵、飛行機等之ニ任<sup>57</sup>」ずるとなっており、遠距離搜索では飛行機、近距離搜索では騎兵を重

51 「統帥綱領」（1918年）防衛研究所所蔵、14枚目。

52 参謀本部、陸軍大学校『統帥綱領・統帥参考』143頁。

53 同上、145頁。

54 同上、567頁。

55 同上、146頁。

56 陸軍省「作戦要務令 綱領、総則及第一部」（1938年）防衛研究所所蔵、53頁。

57 同上。

点的に使用することが記載されている。搜索以外には敵空中勢力の制圧や地上部隊への協力が挙げられている<sup>58</sup>が、騎兵の役割との関係は読み取れない。

ここまで航空の発展が騎兵に及ぼした影響を確認した。航空の発展は、騎兵の搜索の重要性を低下させたものの、両方で特性が異なるため、相互に補い合う形に落ち着いている。搜索と表裏一帯の関係にある騎兵の警戒も同様と見てよいだろう。他方、飛行機による爆撃や空中挺進の登場は、騎兵の挺進行動の重要性を低下させたものと考えられる。

### (2) 戦車の発展

戦車は第一次世界大戦中に誕生している。第一次世界大戦勃発後、日本は臨時軍事調査委員を設置する等、同大戦を注意深く観察しており、その中で戦車の価値を認めている<sup>59</sup>。臨時軍事調査委員の報告では、戦車の用途には陣地戦における歩兵支援としての運用と、その他に独立的な運用があることが挙げられていた<sup>60</sup>。また、日本国内でも、大正9(1920)年には歩兵学校と騎兵学校にフランス製ルノーFT軽戦車が交付され、研究に用いられている。

こうした調査や研究が行われる中で、日本の戦車運用はフランスに範をとり、歩兵の一部として出発している<sup>61</sup>。また、第一次世界大戦の教訓と経験を反映して「戦闘綱要」が編纂されており、その大正15年(1926)版「戦闘綱要草案」に戦車の用途が記載されている。そこには「戦車ハ歩兵ノ突撃及其以後ノ戦闘ニ方リ抵抗スル敵ヲ制圧シ若ハ障碍ヲ排除シテ其進路ヲ拓キ砲兵ノ協力困難ナル状況ニ於テ敵陣地ノ突破ニ際シ特ニ其威力ヲ發揮ス又防御ニ在リテハ逆襲若ハ攻勢移転ニ使用セラル<sup>62</sup>」と記載されており、どの場合にも歩兵と緊密に協同することが述べられている。昭和4(1931)年版「戦闘綱要」では戦車隊は「歩兵ノ戦闘ヲ容易ナラシムルモノトス<sup>63</sup>」とされ、歩兵支援のみが戦車隊の任務となっている。

このように日本の戦車は、当初は歩兵支援のみから始まっているが、その後、日本軍内の一部の研究でも戦車戦力を独立的に運用する案が現れている<sup>64</sup>。昭和13(1938)年版「作戦要務令」では歩兵支援を基本としつつも、「師団長ハ配属セラレタル戦車ヲ(中略)状況ニ依リ其ノ一部若クハ全部ヲ直轄使用スルモノトス<sup>65</sup>」という記述が加えられている。『作戦要務令第二部

<sup>58</sup> 同上、22頁。

<sup>59</sup> 葛原『機甲戦』97-98頁。

<sup>60</sup> 同上。

<sup>61</sup> 加登川『戦車』121-124頁。

<sup>62</sup> 陸軍省「戦闘綱要草案」(1926年)防衛研究所所蔵、31-32頁。

<sup>63</sup> 陸軍省「戦闘綱要」(1929年)防衛研究所所蔵、39-40頁。

<sup>64</sup> 加登川『戦車』242-243頁。機甲会『日本の機甲六十年』16-17頁。戦車の研究は、昭和8(1933)年から戦車第2連隊練習部が、昭和11(1936)年以降は戦車学校が担当している。

<sup>65</sup> 陸軍省「作戦要務令 第二部」(1938年)防衛研究所所蔵、18-19頁。

## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

解義』によれば、これは遭遇戦において好機を捕捉した場合に戦車を直轄して挺進運用すること、陣地攻撃において歩兵支援以外に敵陣地の奥に突進させる運用があることを述べたもの<sup>66</sup>とされており、戦車の挺進行動や独立的な運用の可能性を表したものであるといえる。実戦における戦車の運用でも、昭和13（1938）年の徐州会戦では、戦車第1大隊を基幹とした臨時編成部隊の挺進行動による隴海線（中国軍の退路に当たる鉄道）の遮断が行われている。

「作戦要務令」は師団レベルの典令範であり、かつ、「諸兵種ノ協同ハ歩兵ヲシテ其ノ目的ヲ達成セシムルヲ主眼<sup>67</sup>」とするように、歩兵を主兵として記載されたものである。そのため、先述の戦車の挺進行動や独立的な運用は、あくまで歩兵を主兵とした一般師団内での運用であって、戦車を主体としたものではない。それでも、師団内の騎兵部隊と同程度には戦車も軽快な機動性と独立した戦闘能力を有していることを認められつつあるということであり、歩兵支援を役割として出発した戦車が、いわゆる機動戦闘兵種としても台頭してきたことを表している。ただし、「配属セラレタル戦車」という表現に表れているとおり、戦車の数は限定的であり、後述の搜索隊内の戦車中隊を除いて一般師団の固有編制に戦車部隊はなかった。先に触れた戦車第1大隊も師団に所属しない部隊である。

昭和15（1940）年版「戦車操典」の「綱領」では「第十一 戦車ノ本領ハ卓越セル機動力ト偉大ナル攻撃力トヲ發揮シテ率先敵中ニ突入シ敵ノ戦闘力ヲ圧倒破砕シ諸兵協同ノ実ヲ挙ゲ以テ全軍戦捷ノ途ヲ拓クニ在リ<sup>68</sup>」となっている。仮に戦車があくまで歩兵の火力支援のみを役割とするものとして発展したならば、本領の最初に「卓越セル機動力」は挙がらないはずであり、ここにもいわゆる機動戦闘兵種として位置づけられつつある一面が表れていると筆者は考える。騎兵は日本陸軍の中で唯一の機動戦闘兵種ではなくなりつつあった。

技術面の参考として、戦車の速度に触れる。第一次世界大戦中に運用されたマークIV戦車の最高速度は時速6キロメートル程度という鈍足であったのに対して、昭和4（1929）年に制式化された日本初の国産戦車である八九式中戦車の最高速度は時速25キロメートルに、昭和12（1937）年に試作車が竣工した九七式中戦車の最高速度は時速38キロメートルまで向上していた。後述する九二式重装甲車の最高速度は時速40キロメートルである。ちなみに馬の速度は、伸暢駢歩（最高速度）で時速約25キロメートル程度<sup>69</sup>とされていたことから、戦車の速度は昭和10年代半ばまでに十分に快速と呼べる程度まで向上していたといえるだろう。

戦車に関連する兵器として、軽装甲車も発展している。昭和8（1933）年に「豆タンク」と呼ばれる九四式軽装甲車が誕生しており、もともとは補給用であったが、支那事変では戦車と

<sup>66</sup> 安西理三郎『作戦要務令第二部解義』（軍事指針社、1940年）47-50頁。

<sup>67</sup> 陸軍省「作戦要務令 綱領、総則及第一部」（1938年）防衛研究所所蔵、4頁。

<sup>68</sup> 陸軍省「戦車操典 綱領、総則及第一部」（1940年）防衛研究所所蔵、6-7頁。

<sup>69</sup> 教育総監部「馬術教範」（1938年）防衛研究所所蔵、付図第1の資料から筆者計算。

して使われることが多かったようである。昭和13(1938)年版「作戦要務令」では軽装甲車を「緊要ナル搜索、指揮連絡等ニ任ズルコトアリ<sup>70</sup>」として、従来は騎兵が担当していた運用に充てることも記載されている。このように、搜索に関しては、軽装甲車の発展も騎兵の重要度を低下させつつあった。

本項の最後に、騎兵内部における戦車や装甲車に関する検討状況やその位置づけについて述べる。先述のとおり騎兵学校にも研究用に戦車が交付されている。そして、騎兵学校内に装甲自動車班ができて研究が行われ、九二式重装甲車の開発に結びついている<sup>71</sup>。この装備は「騎兵用偵察車として制作されたために重装甲車と命名されているが、実質的には軽戦車であり、九五式軽戦車の先駆ともいえる<sup>72</sup>」とされている。九二式重装甲車に引き続き、九五式軽戦車も作製されている。

装備の開発に加えて、編制にも変化が見られ、騎兵旅団と師団内騎兵部隊の両方で装甲車が装備され始めている。昭和6(1931)年に満州事変が勃発し、騎兵第1旅団と第4旅団が出動することになった。出動に当たり、装甲車を有する自動車班と装甲車隊がそれぞれの旅団に配属された。昭和8(1933)年に両旅団はまとめられて騎兵集団となった後、昭和10(1935)年に自動車班と装甲車隊は合一して騎兵集団装甲車隊となっている。また、昭和12(1937)年に支那事変が勃発すると、師団の新設が行われた。これらの師団では乗馬の騎兵連隊に代えて乗馬1個中隊と装甲車1個中隊から成る師団搜索隊が編制化されている。

そうした中で改訂發布された昭和12(1937)年版「騎兵操典」では、「戦車ノ主要ナル任務ハ卓越セル機動力、火力、踏破力並装甲ノ威力ニ依リ適時適所ニ急襲的戦闘ヲ遂行シ又ハ果敢迅速ナル搜索等ニ任シ以テ騎兵ノ任務達成ヲ容易ナラシムルニ在リ<sup>73</sup>」とされている。戦車が騎兵と類似した特性と用途を有することが記載されている一方で、その扱いは騎兵と同等ではなく、騎兵の補助兵器として位置づけられている。

以上、主として典令範を参照しつつ、騎兵の役割が日本陸軍全体の中でどのように変化していったかを確認した。建軍当初は騎兵の独壇場であった搜索は航空と分担する形になり、軽装甲車も現れたことで騎兵に対する期待値は低下していった。警戒や遮蔽に関しても同様である。地上の挺進行動はその必要性自体が低下した上、騎兵だけでなく戦車でも可能となった。このように、騎兵の役割は新兵種や新兵器に取って代わられつつあり、日本軍全体の中に占める重要度は低下していったのは確かである。しかしながら、昭和10年代半ばにおいて、これらの新

<sup>70</sup> 陸軍省「作戦要務令 第二部」(1938年)防衛研究所所蔵、11頁。

<sup>71</sup> 「将軍は語る 原乙未生中将のお話—戦車とともに六十年—」『偕行』365号(1981年5月)8-9頁。

<sup>72</sup> 竹内昭『日本の戦車』(上)増補改訂版(出版共同社、1969年)21頁。

<sup>73</sup> 陸軍省「騎兵操典」(1937年)防衛研究所所蔵、279頁。



## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

兵種や新兵器は発展途上にあり、騎兵に対してある程度の期待値は存在し続けたということも同時にいえるだろう。

### 4 騎兵の特性の喪失と再獲得

第3節では、航空や戦車が台頭していった過程を確認した。このように新兵器や新兵種が発展を続けたのに対して、騎兵の発展は限界を迎えることになったのは否定できない。これまで述べてきたとおり、世界的な騎兵の衰退傾向は日本陸軍の創設以前から始まっており、日本陸軍の騎兵もその流れの中で廃止された。ただし、騎兵は馬を捨てて機械化することで、騎兵がかつて有していた特性を再獲得する契機を得ている。本節では騎兵の廃止と機械化に関する議論を中心に、騎兵の特性の喪失と再獲得の過程を見ていく。

#### (1) 騎兵の特性の喪失と騎兵の葛藤

##### a 建軍から日露戦争頃まで

第1節で述べたとおり、日本陸軍が創設された19世紀後半は、軍事技術上、火力が発達してきた時期であり、欧州列強の騎兵も従来どおりの戦い方が困難になってきていた。同じく第1節で紹介した撃針銃や後装式の銃砲に加え、19世紀末には無煙火薬が発明されている。火力の発達をもたらしたものは、射程の延長や発射速度の増大だけではない。無煙火薬の発明以前は、騎兵は戦場の発射煙に隠れて敵に接近できていたが、無煙火薬の発明により煙に隠れることが困難になった。これは主戦闘方法が白兵であった騎兵にとって大きな問題であった。日本陸軍の騎兵はこの当時、まだ創設に伴う自らの役割を模索している段階であったが、欧州の騎兵も兵器の発達によって戦場の環境が変化する中で、そのあり方を模索していた。『偕行社記事』は、当時の欧州各国の騎兵に関する研究を、翻訳記事の紹介という形で扱っている。

明治23(1890)年にはドイツの兵事雑誌の翻訳記事として、騎兵の徒歩戦闘の必要性を述べる記事が掲載されている<sup>74</sup>。内容は兵器の進歩により騎兵の活動は困難になったが、搜索や遮蔽は騎兵でなければできない役割であり、この役割を果たすためにも、「騎兵ノ精神ニ悖ルコト<sup>75</sup>」や「理論ニモ合ハサル<sup>76</sup>」という理由で徒歩戦闘を避けるべきではないというものである。

明治30(1897)年には、ドイツとフランスの兵事新聞や雑誌の翻訳記事として、騎兵はもは

<sup>74</sup> 監軍部「騎兵ノ徒歩戦闘ヲ論ス」『偕行社記事』40号(1890年7月) 49-58頁。

<sup>75</sup> 同上、49頁。

<sup>76</sup> 同上。

や正面からは歩兵に対して戦えないとする複数の記事が掲載されている<sup>77</sup>。内容は騎兵を不要とするものではなく、騎兵は引き続き必要であり、いかにその役割を果たしていくかを論じたものである。ここで挙げられている騎兵の役割とは搜索・警戒、掩護、追撃や鉄道の破壊等であり、第2節で見た日本陸軍の騎兵と同様である。これらの役割を果たすためには速度を發揮することが必要であるため、軽騎兵を重視していくべきことが述べられている<sup>78</sup>。そして歩兵に対して戦闘を行う際は「警戒十分ナラス又ハ火力ニ依テ攪動セラレ隊伍動揺、秩序混乱<sup>79</sup>」している時等、敵の不意を打つように心がけることや、槍や刀による襲撃ではなく火力を使用した徒歩戦闘を行うこと<sup>80</sup>が挙げられている。ただし、白兵による襲撃を全く不要とする論調ではなく、十分準備した歩兵を相手に戦う場合以外（砲兵への攻撃や騎兵同士の戦闘等）は襲撃を行い得るとする論調である。なお、明治34（1901）年には、歩兵を相手に戦えるようにするために騎兵の隊形変更を研究したロシアの記事が掲載されている<sup>81</sup>。

日露戦争中から戦争後にかけて、日露戦争における日露両国軍の騎兵に対する論評や研究が掲載されている。既出の議題を除くと、騎兵に代えて乗馬歩兵や自転車部隊を使用する案に関する議論<sup>82</sup>や大規模な騎兵部隊を必要とする意見<sup>83</sup>、騎兵の火力増強を求める意見が確認できる。背景にあるのは、日本及び諸外国の軍事関係者から、日露両国の騎兵があまり活躍していないと観察されていることである。活躍しない騎兵を削減、廃止しようとするのが乗馬歩兵や自転車部隊に代える意見である。一方で、特に日本騎兵が活躍できない理由をその規模の小ささに求めているのが騎兵部隊の大規模化や火力の充実を求める意見である。なお、ロシア騎兵が活躍していない理由は、その能力不足や準備不足に求められており、平素から十分な騎兵を維持する必要性が述べられている<sup>84</sup>。

---

<sup>77</sup> 参謀本部「騎兵戦闘戦術」『偕行社記事』170号（1897年5月）18-32頁（フランス雑誌記事を翻訳掲載したドイツ新聞記事を重訳したもの）。陸軍乗馬学校「騎兵戦術革新意見」『偕行社記事』179号（1897年10月）59-71頁（フランス記事を翻訳したもの）。偕行社「未来戦ニ於ケル歩兵及騎兵」『偕行社記事』181号（1897年11月）11-17頁（ドイツ新聞記事を翻訳掲載したフランス新聞記事を重訳したもの）。

<sup>78</sup> 偕行社「未来戦ニ於ケル歩兵及騎兵」17頁。

<sup>79</sup> 参謀本部「騎兵戦闘戦術」『偕行社記事』170号（1897年5月）30頁。

<sup>80</sup> 陸軍乗馬学校「騎兵戦術革新意見」『偕行社記事』179号（1897年10月）66頁。

<sup>81</sup> ズルゲーニン「騎兵ノ歩兵ヲ攻撃スル方法如何ヲ論ス」『偕行社記事』268号（1901年6月）49-57頁。エル、デ、ウィット「騎兵ノ歩兵ヲ攻撃スルニ如何セハ可ナルヤト云フ」『ズルゲーニン』氏ノ論説ニ就テ『偕行社記事』270号（1901年7月）83-88頁。

<sup>82</sup> 「日露戦争ニ於ケル騎兵」『偕行社記事臨時』22号（1905年11月）63-71頁（フランス雑誌記事を翻訳したもの）。騎兵将校某「騎兵集団ノ必要」『偕行社記事』338号（1906年4月）13-21頁。

<sup>83</sup> 石橋正人訳「騎兵ノ将来」『偕行社記事臨時』7号（1905年3月）5-7頁（イギリス雑誌記事を翻訳したもの）。騎兵将校某「騎兵集団ノ必要」13-21頁。

<sup>84</sup> 「日露戦争ニ於ケル騎兵」63-71頁。

## b 第一次世界大戦以降

第一次世界大戦をきっかけに、さらに騎兵のあり方についての疑問や騎兵の革新に関する意見が現れてくる。第一次世界大戦が騎兵に重大な影響を与えたのは第3節で述べたとおりである。これを受けて騎兵は以後どうあるべきかについて、『偕行社記事』や騎兵の部内誌である『騎兵教育ノ参考』と『騎兵月報<sup>85</sup>』で議論が交わされている。そして、それらの意見は全く新しいものではなく、これまで見てきたような19世紀から続く議論の延長線上のものであった。

まず、大正5(1916)年には『偕行社記事』の懸賞問題の答案記事として「騎兵戦術ノ変遷ヲ述ヘ其ノ将来ヲ論ス」という記事が2本確認できる<sup>86</sup>。その内容に目新しいものはないが、こうした懸賞問題が掲載されること自体に、騎兵のあり方に検討が求められていることが表れている。同年の『騎兵教育ノ参考』には飛行機や自動車と騎兵の関係を検討する複数の記事が見られる<sup>87</sup>。大正6(1917)年には「騎兵ニ就テ」というフランスの翻訳記事が『偕行社記事臨時増刊』に連載されている<sup>88</sup>。記事の内容から執筆者は実戦に参加したフランス軍の騎兵連隊長クラスの人物と推察できる。そして、騎兵将校の記事でありながら、その内容は騎兵の将来の活躍に悲観的であり、騎兵を縮小して歩兵や砲兵を充実させるべきだと述べられている。

大正8(1919)年から翌年にかけて『偕行社記事』誌上で行われた國司伍七少将(当時参謀本部第4部長)と騎兵将校の間の論争には、騎兵が抱えていた問題点がよく表れている。この論争<sup>89</sup>はあくまで個人名をもって行われた私的なものではあるが、参謀本部の部長や騎兵学校長、騎兵旅団長等が参加している上に、騎兵不要に関する極端な意見とこれに対する反論が見られ、当時の意見を代表するものと考えてよいだろう。なお、大正中期の騎兵に関する論争は

<sup>85</sup> 昭和4年1月に『騎兵教育ノ参考』は『騎兵月報』に名称が変更された。

<sup>86</sup> 大高盛哉「騎兵戦術ノ変遷ヲ述ヘ其ノ将来ヲ論ス」『偕行社記事』505号(1916年8月)71-94頁。葉室俊雄「騎兵戦術ノ変遷ヲ述ヘ其ノ将来ヲ論ス」『偕行社記事』506号(1916年9月)51-64頁。

<sup>87</sup> 鉄鞭「騎兵革新論ニ就テ」『騎兵教育ノ参考』9号(1916年2月)1-22頁。この記事は超然居士「騎兵革新論」(『騎兵教育ノ参考』6号掲載)に対する意見記事だが、「騎兵革新論」は未確認。某将校「騎兵教育ニ関スル講話」『騎兵教育ノ参考』19号(1916年12月)1-20頁。なお、『騎兵教育ノ参考』の頁数は、一つの冊子を通した連番ではなく、記事毎に1頁からの連番となっている。以下、同じ。

<sup>88</sup> C中佐「騎兵ニ就テ」『偕行社記事臨時増刊』83号(1917年9月)～85号(1917年11月)連載。ただし、84号は未確認。

<sup>89</sup> 論争は以下の記事で行われている。元本を確認できなかったものは、『日本騎兵史』を参照した。栗原幸衛「騎兵に関する管見」『偕行社記事』536号(1919年4月)69-78頁。小坂平「騎兵ニ関スル管見」『偕行社記事』539号(1919年7月)73-80頁。栗原幸衛「会戦に於ける騎兵の価値」『偕行社記事』539号(1919年7月)81-84頁。國司伍七「騎兵ノ将来ニ就テ」『偕行社記事』543号(1919年11月)1-8頁。吉橋徳三郎「大正八年十一月偕行社記事所載『騎兵ノ将来ニ就テ』ノ所感」『偕行社記事』546号(1920年2月)1-15頁。國司伍七「再ヒ騎兵ノ将来ニ就テ」『偕行社記事』548号(1920年4月)1-11頁。植野徳太郎「将来に於ける騎兵の戦法に就て」佐久間、平井編『日本騎兵史』下巻、61-66頁。大島又彦「騎兵問題に関する所見」佐久間、平井編『日本騎兵史』下巻、66-77頁。吉橋徳三郎「騎兵問題ニ対スル管見」佐久間、平井編『日本騎兵史』下巻、78-81頁。なお、吉橋は最後の論説の『偕行社記事』への掲載を辞退している。

その後も存続する<sup>90</sup>が、本論争の内容と大同小異である。

騎兵を不要とする側の論拠を整理すると、以下の3点にまとめられる。1点目は第一次世界大戦の大部分が陣地戦であり、陣地戦では騎兵が活動する機会がほとんどないことである。2点目は航空機の登場により、搜索上の騎兵の役割の必要性が低下したことである。3点目は戦場における火力の増大により、当時の騎兵の主戦法かつ独特の戦法であった乗馬戦が不可能となってきたことである。論調は総じて、以後の戦場では騎兵は不要で、例えば、乗馬歩兵といった他兵種等で代用してもよいのではないかというものである。戦車あるいは機械化部隊をどうすべきかに関する議論の登場は大正期末頃のことであり、まだ登場していない。その一方で3点目の火力に関する事項は19世紀から継続している議論である。これらの騎兵不要論に対する反論を論点別に整理すれば、次のとおりである。

1点目の陣地戦では騎兵が活動できないという論拠に対しては、騎兵界側から二つの反論が見られる。一つ目は陣地戦の戦い方の面についてであり、陣地戦においても敵陣地突破後や敵に自軍陣地を突破された際の対処のために騎兵の出番があるため、引き続き十分な騎兵部隊を保有する必要があるというものである。二つ目は将来の戦争観に関わるもので、第一次世界大戦が陣地戦であったのは特異な状況であり、本来、作戦は運動戦であるべきこと、そして日本陸軍が戦場とすべき「東亜」の地形では運動戦が可能であることをもって、将来の陣地戦自体を否定するものである。この論点に結論を出すためには、将来戦をどう予期するか、または陣地戦をどう戦うかという軍中央の考えが必要になる。しかし、この論争に軍中央は関与しておらず、これ以上議論を深められるものではなかった。

2点目の航空機の登場により、搜索上の騎兵の重要度が低下したという論拠に関して、國司は、以後の騎兵の偵察は航空機の偵知した事項を確認するだけだと述べている。これに対する騎兵側の反論は、航空機は有力な搜索手段だが短所や運用上の制約もあるため、騎兵と長短相補うことが必要というものである。第3節で見えてきたように、その後の典令範の記載は概ね騎兵側の反論どおりに推移している。しかし、当時の航空機は発展を開始したばかりであり、これも答えを出せるものではなかった。

3点目の戦場における火力の増大により、乗馬戦ができなくなったという論拠は、さらに様々な議論を現出させている。騎兵の戦い方には大きく分けて乗馬戦と徒歩戦の2種類があり、初期から乗馬戦が推奨されていたことは第2節で述べたとおりである。乗馬戦では、軍刀の間合いに入るまで騎兵は無防備であるため、戦場における敵火力が増加すると、敵にぶつかる前に一方的に損害を受けてしまう。このため、乗馬戦は以後困難になるので、騎兵は乗馬戦をやめて徒歩戦に重点を移すべきということがこの議論の起点である。騎兵界も、少なくとも以後は

---

<sup>90</sup> 宇佐美興屋「騎兵ニ就テ」及び高橋大尉「今後ノ騎兵」『騎兵教育ノ参考』74号(1921年8月)。

徒歩戦も重視していかなければならないということには同意している。問題はここからである。主戦闘を徒歩戦として歩兵的に行い、移動のみ乗馬で行動するというのであれば、乗馬歩兵や自転車歩兵等でも代用できるため、騎兵は不要ということになる。

これに対する騎兵界の反論は三つ見られる。一つ目は乗馬戦の必要性を訴えるものである。そもそも騎兵の戦闘は、敵主力と正面から戦うためのものではなく、捜索のために敵騎兵と戦ったり、敵主力の側背を襲撃したりするためのものである。敵の不意を突くような急襲的な行動は将来も起こりうるし、そこでは依然として乗馬戦が有効であるため、乗馬戦を軽視すべきではない。そして、乗馬戦を実施するためには十分な訓練が必要である。歩兵が歩兵の訓練を行った上で、さらに乗馬と乗馬戦の訓練を行うのは限られた兵役期間では困難なので、乗馬歩兵では騎兵の代わりは務まらないという意見である。

二つ目は移動間の特性を挙げたものである。一つ目の反論とも関係するが、騎兵は移動しながら戦闘できるのに対して、乗馬歩兵や自転車歩兵は移動間に戦闘はできず無防備である。したがって、それらで騎兵の代わりはできないというものである。

三つ目は形而上のもので、騎兵としてのあり方、考え方に関するものである。騎兵精神は乗馬戦に表れており、騎兵は乗馬戦ができるから徒歩戦もできるし、捜索等の各種任務において積極的な行動が可能である。したがって、いかに戦闘において徒歩戦の比重が高まっても、乗馬戦をなくすべきではないという意見である。

第2節で見たように、騎兵の本領は高い機動力と独立的な戦闘力にある。徒歩戦の比重が高まった後の昭和6(1931)年版「騎兵操典」においても、「機動力ハ騎兵戦闘ニ於ケル最モ重要ナル要素<sup>91</sup>」と位置づけられている。これらの論争や操典の記述から、騎兵が描いていた「機動戦闘兵種」としての理想像は、乗馬戦に見られるように移動しながら戦闘ができること、さらには機動力や速力を戦闘力に変換できることにあると筆者は考える。しかし、徒歩戦を行うと、戦闘中の機動力が失われてしまうため、真に騎兵の本領を発揮しているとはいえない。その一方で、徒歩戦を重視していかなければならない現実の環境があり、一例として昭和6(1931)年に勃発した満州事変ではほとんどが徒歩戦であった<sup>92</sup>。ここに騎兵の葛藤がある。騎兵がいかに騎兵と乗馬歩兵の違いを述べても、外部から見ると、その実相は國司が述べるとおり、乗馬歩兵とあまり変わらないものとして映ったのではないかと筆者は考える。

さらに、騎兵は徒歩戦を行ったとしても、歩兵に比して勢力、装備ともに劣るという制約があった。その理由としては、騎兵が徒歩戦を行う際、馬を管理する兵員は戦闘に参加できないこと、騎兵を重装備にすると機動力が失われてしまうため、装備改善に制約があること等が挙げられる。機械の発達がこの問題解決の糸口になるわけであるが、上記の議論が行われた当時

<sup>91</sup> 教育総監部「騎兵操典」(1931年)防衛研究所所蔵、337頁。

<sup>92</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』下巻、204頁。

は解決法が見つからない制約であった。

### (2) 機械化による騎兵の特性の再獲得

#### a 騎兵の機械化に関する意見

騎兵の機械化に関する意見が現れるのは大正期末頃からである。まず、『騎兵教育ノ参考』や『騎兵月報』において海外の騎兵雑誌の内容を紹介する形で騎兵機械化の意見が登場する<sup>93</sup>。概ね昭和一桁台までの意見は馬を機械に代えようというのではなく、騎兵の戦闘力を向上させるために機械を活用しようという主旨であった。騎兵の戦闘力を向上させる必要があることは諸外国でも共通の認識であり、戦車、砲兵、飛行機や自動車歩兵等で騎兵の弱点を補填しようという意見が見られる。馬に代えて機械を導入するという意見になっていない理由として、機械や機械化部隊に対する馬や騎兵の利点が挙げられている。自動車は馬よりも単なる輸送手段としては速度で優っているが、戦術的輸送手段（路外や敵火の下での移動を指すと考えられる・・・筆者）としての速度は馬に劣っている。戦車も自動車も騎兵に比べて視界が不良で、自ら発する騒音のため外部の音が聞こえづらいため、捜索には向かないといったものである。

大正12(1923)年には『騎兵教育ノ参考』にジョン・フラー(John Frederick Charles Fuller)の戦車に関する翻訳記事<sup>94</sup>が掲載されている。記事の内容は以後の戦車の発展とその影響を述べるもので、将来は軍の行動が道路や鉄道から解放されることや機械が筋肉(人力や馬匹)に勝つことが触れられている。先述のとおり、この頃には騎兵学校でも戦車の研究が開始されている。この記事に戦車と騎兵の関係を扱った箇所はない。それにもかかわらず、後に戦車の運用思想で有名になるフラーの記事が『偕行社記事』ではなく、騎兵の機関誌である『騎兵教育ノ参考』に掲載されていることに、日本騎兵が戦車に対して関心を抱いていたことが表れているといえるだろう。

昭和5(1930)年から翌年にかけて、『偕行社記事』に「軍機械化私観」と題する日本陸軍全般の機械化に関する論説が掲載されている<sup>95</sup>。この論説では将来的には全軍機械化を考える必

<sup>93</sup> 矢野少尉「将来ノ機動師団」『騎兵教育ノ参考』115号(1925年1月)1-16頁(イギリスの騎兵雑誌を翻訳したもの)。陸軍騎兵学校訳「騎兵廃止論ヲ駁ス」『騎兵教育ノ参考』139号～141号連載(1927年2月～4月)(フランスの騎兵雑誌を翻訳したもの)。米国ホーキンス騎兵大佐述、大山騎兵中尉訳「飛行機及戦車ノ発達ニ伴フ近代騎兵ノ価値及任務」『騎兵教育ノ参考』140号(1927年3月)1-19頁。城戸俊三「現代の騎兵 其教育及運用に関する二三の考察」『騎兵月報』14号(1930年2月)9-18頁、15号(1930年3月)5-14頁、(ドイツ書籍を翻訳したもの)。石川秀江訳「騎兵の機械化」『騎兵月報』24号(1930年12月)37-40頁(フランス軍事雑誌を翻訳掲載したドイツ誌を重訳したもの)。

<sup>94</sup> 柳川平助「陸上ニ於ケル海上戦ノ発達ト其ノ将来海軍作戦ニ及ホス影響(摘訳)」『騎兵教育ノ参考』91号(1923年1月)～92号(1923年2月)連載。

<sup>95</sup> 井上芳佐「軍機械化私観」『偕行社記事』675号(1930年12月)71-86頁、676号(1931年1月)93-110頁、677号(1931年2月)85-100頁、連載。

## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

要があるとした上で、当面の各兵種の機械化の程度が説明されている。騎兵に関しては装甲自動車隊の配属や輜重の自動車化、自動車歩兵の配属が挙げられているが、ここでも馬を廃止してその他の兵器に代えるべきという意見はない。また、この論説では機動兵団として騎兵団に加えて軽装甲兵団を創設することも提案されている。性能上、軽装甲兵団は騎兵にない利点を有しており、適切に運用すれば軍の作戦が有利になるというものである。騎兵に対する軽装甲兵団の長所として挙げられているのは速力、行動半径、火力及び防護力であり、短所として挙げられているのは夜間の行動、細部の搜索、警戒である。

昭和 10 (1935) 年、『騎兵月報』に「騎兵非常時の弁」と題する、当時の日本騎兵としては画期的な論説<sup>96</sup>が掲載されている。筆者が調査する限り、これ以前の騎兵に関する議論は搜索上の騎兵の必要性、乗馬戦の必要性や可能性、あるいはその方法、そして機械化兵器・部隊とどのような関係を築いていくかという内容が主であった。見方を変えれば、搜索を主任務とする乗馬騎兵が、将来いかに生き残っていくかを検討する内容であった。しかし、この論説は騎兵の本質を機動部隊として捉え直し、あらためて騎兵は搜索兵種から戦闘兵種になること、馬は機動のための一手段でしかないこと、機械化兵団に関する問題は騎兵が取り扱うべきことを述べている。また、論者は、主兵（歩兵）に対応する機動兵として騎兵を捉えており、一般戦術に対する騎兵戦術の存在を提唱している。それまで、戦闘場面に関する議論といえば乗馬戦と徒歩戦の性質や方法、その必要性といった戦闘方法に関するものに終始していたのに対して、議論の次元が変化しているといえるだろう。

この論説の後にも、乗馬部隊の必要性を述べる論説がある<sup>97</sup>が、内容に目新しいものはない。昭和 12 (1937) 年、『騎兵月報』に、戦車運用に関して世界的に有名になるドイツのハインツ・グデーリアン (Heinz Wilhelm Guderian) の論説<sup>98</sup>が掲載されている。主な内容は第一次世界大戦中の戦車の運用とその教訓、戦後の各国の戦車の発展を説明するものであるが、末尾に機械化部隊の戦闘場面を例にとり、「機械化部隊は騎兵なり<sup>99</sup>」とする部分がある。これは、機械化部隊の指揮官には騎兵的発想が求められることを説明したものである。先述のフラーの記事と同じく、この記事が『偕行社記事』ではなく『騎兵月報』に掲載されていることに、騎兵の関心を伺える。

第 3 節で見たように、昭和 12 (1937) 年版『騎兵操典』では、戦車は乗馬部隊の補助的位置

<sup>96</sup> 春日生「騎兵非常時の弁」『騎兵月報』81号(1935年9月)49-63頁。

<sup>97</sup> 今神進訳「近代騎兵の用法に就て—二十年前の世界大戦の諸戦歴より観たる—」『騎兵月報』83号(1935年11月)39-48頁(ドイツ記事を翻訳したもの)。編纂部「英、伊快速兵団の経験より得たる師団騎兵への暗示」『騎兵月報』84号(1935年12月)49-50頁。

<sup>98</sup> グデーリアン大佐「機械化概観」『騎兵月報』96号(1937年1月)56-82頁(ドイツ記事を翻訳したもの)。

<sup>99</sup> 同上、82頁。

づけであった。しかし、誌上の議論ではこのように、乗馬騎兵の維持にこだわらない意見や、軍全体の機械化の中心を担うべきだという意見も含まれるようになっている。

最終的な騎兵廃止前後の議論に進む前に、ここで当時の騎兵の状況を見ておきたい。昭和6(1931)年の満州事変で騎兵旅団に装甲車が配属されたことや、昭和12(1937)年の支那事変後に装甲車を有する師団搜索隊が編制化されたことはすでに述べた。騎兵は馬を捨てないまでも、機械化は徐々に進められつつあった。満州事変から支那事変にかけて、戦場における実際の騎兵運用は、戦闘が中心であった。ただし、多くの場合、敵は匪賊であり、正規軍同士の本格的な近代戦とは異なっていた。騎兵が搜索に使われなかったのは、搜索を飛行機で行えるようになったことも関係しているだろう。

そして、昭和14(1939)年にノモンハン事件が発生する。ノモンハン事件はソ連軍との国境紛争で、参加した日本軍が壊滅的な打撃を受けたことでも知られる。この事件には第23師団搜索隊が参加しており、大打撃を受けている。事件終了後、大本営陸軍部に『ノモンハン』事件研究委員会」が設けられ、事件の調査に当たっている。

同委員会が提出した事件の研究報告では、ソ連軍は優勢な飛行機、戦車、砲兵と補給を有し、各機関が機械化されている部隊として認識されており<sup>100</sup>、日本陸軍がそのようなソ連軍と戦うための教訓が多岐にわたり説明されている。ここでは、騎兵の役割や特性、機械化に関する教訓のみを扱う。

まず、騎兵は「搜索連隊ノ乗馬中隊ヲ乗車中隊トシ連隊砲<sup>101</sup>」を装備して、編制装備の近代化を図るべきことが挙げられている。続いて、教育練成に関する教訓として、騎兵の機械化に伴う幹部教育のために騎兵学校を改編することや、機械化と馬に関する事項の総合的な教育・研究を行う機関を設置することが挙げられている。騎兵に関係するものとしては、これらの他に装甲機動兵団の必要性が述べられている個所がある<sup>102</sup>。ここでいう装甲機動兵団とは、軍内にあって第一線突破後の戦果拡張等に使用されるものであり、概ね騎兵部隊に似た特性を有しているが、騎兵よりも高い速度と行動半径を有しているものと説明されている<sup>103</sup>。

第2節で見たとおり、第一線突破後の追撃といった戦果拡張の役割は、従来は騎兵部隊に課せられていた。しかし、本事件の教訓では、戦果拡張の役割を担う機動部隊は依然として必要とされている一方で、機械化されたソ連軍に対してその役割を果たすためには、能力上、騎兵では不十分であると判断されていることがわかる。なお、機械化に関する教訓としては、この

---

<sup>100</sup> 大本営陸軍部「ノモンハン」事件研究委員会第一研究委員会『ノモンハン』事件研究報告（通報）（昭和15年1月10日）防衛研究所所蔵、10頁。

<sup>101</sup> 同上、57頁。

<sup>102</sup> 同上、56・57頁。

<sup>103</sup> 同上、21頁。なお、この説明箇所は、厳密には「装甲機動兵団」ではなく「機甲兵団」に関する説明箇所であるが、本報告は両者を明確には区別しておらず、論旨上、両者はほぼ同一に扱われている。



## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

他に教育総監部内に機甲監部を設置して機甲に関する教育を促進すること<sup>104</sup>も挙げられている。このように、騎兵の機械化の必要性は、実戦による教訓にも表れている。さらに、騎兵に代わる機動兵団の必要性も言及された。

### b 騎兵の廃止と機甲本部の創設に関する意見

「はじめに」で言及した、騎兵の廃止に至る一つの重要な要素となったとされる、吉田恵中將が提出した意見の内容を見てみたい。『日本騎兵史』によると、この意見具申は昭和15(1940)年2月から昭和16(1941)年1月まで4回にわたり行われている。この時期は第二次世界大戦の緒戦に当たるドイツのポーランド侵攻やフランス侵攻がすでに行われている時期であり、情勢の変化に応じてこの吉田の意見にも変化が見られる。論点も複数あるので、論点ごとにその主張を追う。

まず、議論の軸となる機械化、装甲化された兵団の創設に関する意見を確認する。第1回目の意見具申はノモンハン事件が発生し、独ソのポーランド分割が終了した後の昭和15(1940)年2月に行われている。この意見具申で吉田は、機動兵団として機械化兵団を創設すべきという主旨のことを述べている。ここでいう機動兵団とは、会戦において敵の退路遮断や追撃に使用する部隊として記述されており、従来であれば騎兵が担当していた分野である。つまり、騎兵の代わりに機械化兵団を創設すべきという意見であった。

これに続く第2回目の意見具申は、ドイツのフランス侵攻の大勢が決した昭和15年6月に行われている。第2回目以降の意見では、歩兵を基幹とする一般兵団に代わって機甲兵団を創設すべきとされており、機甲の発展を統括する機甲本部も同時に創設すべきという意見に変化している。ここでいう機甲兵団とは、戦車を基幹として、各種部隊を編成した部隊のことであり、第1回目の意見具申に見られる機械化兵団とは内容が異なる。最終的に第4回目の意見では、それまで騎兵の機械化あるいは機甲兵団の設立に関して進展が見られないので、自らの所掌する騎兵を廃止して、その資源を活用して、代わりに装甲兵団を新設しようという意見になっている。

吉田が騎兵を廃止しようとした理由には、騎兵はもはや環境の変化に対応できず、戦場でその特性が発揮できないことが挙げられている。第2回目の意見具申の中で、騎兵はかつて決勝兵種であったが、火器の進歩により搜索警戒を主な役割とする従属的地位に落ち、さらに機械の発達により、搜索警戒すらできなくなっている実情が述べられている。環境の変化に合わせて充実させてきた騎兵の徒歩戦も「最モ不経済ナル輸送法ト極メテ不徹底ナ訓練ヲ以テ戦場ニ臨マントスルモノデ之ヲ以テ其ノ本領ヲ發揮セシメントシ或ハ發揮スベシト信ズルガ如キ

<sup>104</sup> 同上、97頁。

ハ甚シキ自己欺瞞デアル<sup>105</sup>」として批判されている<sup>106</sup>。

次に、機動兵団としての騎兵部隊と機械化部隊のそれぞれの利点はどのように評価されていたのだろうか。第1回目の意見具申では、純然な速度は機械化部隊が優る一方で、地形に適應する柔軟性は騎兵の方が優れているとされている。しかし、騎兵の戦闘力を強化するために近代的な兵器を装備させても、騎兵がその利点である地形への柔軟性を発揮しようとする、近代的な兵器は随伴できなくなってしまうため、結局は馬を主体とする部隊では近代戦は戦えないことが述べられている。なお、装備の強化ではなく、機械化部隊を配属して乗馬騎兵部隊の戦闘力を強化することも検討されている。しかし、機械化部隊が行動困難な地形では、戦力の骨幹である機械化部隊を残置しなければならず、結局、戦闘力が失われてしまうため、やはり不適切であるとされている。

また、乗馬騎兵を乗車騎兵に代えようとする案に関しては、二つの点から不可とされている。一つ目は下車後の重火器の運搬手段がないため、戦闘力が歩兵に劣るというものである。二つ目は、機動間は搜索警戒能力が低下するだけでなく、戦闘力が皆無であるので、そもそも機械化機動部隊とは全く性質が異なるというものである。

結局、第3回目の意見具申ではドイツ軍の装甲兵団が路外で機動したことが紹介されており、それまで騎兵部隊が優れているとされた地形に対する柔軟性についても、機械化部隊は益々向上していくであろうということが述べられている。また、機械化部隊は交通網が発達していない「東亜」の地形では行動できないため、機械化が不要であるという意見があったのに対して、「東亜」の地形に特化した機械化を行えば列強より優位に立てるという反論も行われている。

これらの意見具申と同時期である昭和15(1940)年12月から翌年1月にかけて、『偕行社記事』誌上に「騎兵の革新」という論説<sup>107</sup>が連載された。論者の馬場正郎少将は先述の騎兵学校装甲自動車班での戦車の研究にも関わっている。また、昭和14年8月から昭和15年12月まで騎兵監部付、その後、騎兵集団長を務めた人物でもある。その内容はそれまで失われ続けてきた騎兵の本領である機動力と独立的な戦闘力、そして、乗馬戦に相当する能力を機械化によって回復しようという意見である。すなわち、第二次世界大戦の状況から、快速部隊の必要性を述べた上で、「今や騎兵は戦略的要求より速に機械力の利用に依りて其の本質的性能を充実増大するの要あるのみならず、其程度の火力を冒して攻撃を強行し得る能力を備へ、往時の乗馬戦の如く急襲的攻撃を敢行し、(中略)現代に於ける戦車の技術的進歩を利用して、騎兵の革

<sup>105</sup> 佐久間、平井編「日本騎兵史」下巻、360頁。

<sup>106</sup> 役割と特性以外の視点での騎兵廃止の理由として、吉田は糧秣や水の補給及び馬の補充の困難性といった兵站面での問題も挙げている。

<sup>107</sup> 馬場正郎「騎兵の革新(上)」『偕行社記事』795号(1940年12月)19-32頁、「騎兵の革新(下)」『偕行社記事』796号(1941年1月)67-83頁。

新を測る（ママ）こと<sup>108</sup>」が必要であり、騎兵を装甲兵団に代えたとしても「其の本質は依然として速力を主とする戦闘部隊にして機動力と急襲的攻撃力を必要とする任務に使用せられ、（中略）従来の騎兵戦闘と其の真髓に於いては変化<sup>109</sup>」ないとされている。このように、この論説は機甲本部に触れておらず、あくまで機動部隊としての騎兵の革新を述べた記事である一方で、時期的・内容的に見て、騎兵の廃止と機甲本部創設に向けた予鈴のような内容となっている。

吉田と馬場の意見からは、騎兵がその特性を発揮し、少なくとも騎兵の役割を果たすためにはもはや馬を捨てて機械化するしかなく、馬を維持することは機械化部隊の能力発揮にとってマイナスでしかないと考えられていることがわかる。同時に、往年の騎兵のような、機動力を有する機械化兵団は以後も必要であり、この兵団に必要な性質は騎兵の特性と類似しているため、騎兵がそのような兵団に成り替わるべきだと考えられていることが見て取れる。なお、吉田の意見は単に騎兵の機械化にとどまらず、歩兵に代わる装甲兵団の創設まで及んでいる。

### 5 騎兵の廃止に関する考察

#### （1） 騎兵の廃止過程

日本陸軍における騎兵の役割は、建軍以来、日清戦争、日露戦争等を経験して明治期に確立された。それは主として搜索・警戒（遮蔽）にあり、あわせて敵の側背攻撃や追撃も行うというものであった。また、騎兵の本領は機動力と独立戦闘力にあるとされた。第一次世界大戦以降は、航空機や機械化兵器の発達により、騎兵の重要度は低下した。それでも日本陸軍全体としては、騎兵に対して一定の期待を抱き続けていた。一方、戦場の環境は、馬では速度、装備重量ともに対応できないほどに厳しいものに変化してしまった。近代戦において、機動戦闘を行うためには、速度に加えて敵の火力に耐えられる装甲や重火器の携行が必要であり、つまりは戦車や装甲車が必要であった。満州事変や支那事変までは馬を維持したまま、徒歩戦への移行で間に合っていた。馬の限界はその後のノモンハン事件や第二次世界大戦の緒戦（欧州正面）で特に明確に認識された。真に騎兵の役割を果たすためには馬を捨てて機械化するしかない状況になっていたのである。

このように、騎兵は機動戦闘兵種としての自らの位置づけと現実の環境の間に葛藤を抱えており、これを解決できるのは機械化のみであったこと、機甲部隊の戦闘は機動と急襲を中心とするという点で本質的に騎兵戦闘と変わらないと解釈できたこと、そして、これらの内容が誌

<sup>108</sup> 馬場「騎兵の革新（上）」32頁。

<sup>109</sup> 同上。

上の議論で騎兵内に知られていたことが昭和16(1941)年における騎兵の廃止を可能にした主な理由であったと考えられる。吉田の意見具申は、騎兵の廃止と機甲本部の設立を具現化した点で確かに重要だが、その意見具申の前から、騎兵のあり方を根本から変革して機甲へつなごうとする芽は出ていたのである。

同時に、騎兵廃止までの経緯を見てわかるとおり、騎兵は自ら馬を捨ててはいるが、それに代わる機甲部隊を自ら育てたわけではなかった。騎兵も大正期から戦車を研究し、満州事変からは装甲車部隊も有し、かつ、誌上の議論も行ってはいた。しかし、公式の典令範である「騎兵操典」上の戦車の位置づけは乗馬騎兵と同等にはならず、騎兵の支援部隊というものであった。その一方で、歩兵直接支援を役割として使用が始まった戦車は、自らの研究によって、騎兵のような機動的かつ独立的な運用の必要性と可能性を見出していた。さらに、技術面においても、当初鈍足だった戦車は十分に快速といえる程度まで発展していた。その程度まで戦車が発展している中で、騎兵と戦車が合流したのであった。したがって、乗馬騎兵が行き詰ってしまったとき、すでに騎兵以外の努力によって技術面と運用思想面の両方で騎兵を受け入れる土壌が戦車側に準備されており、騎兵側も自らの研究や議論により馬を放擲しても活躍し得ることを、ある程度は理解していた。

### (2) 騎兵の廃止事例からいえること

本稿で扱った騎兵廃止の事例は、騎兵に求められる役割が（重要度は低下したもののその内容は）不変である中で、その役割を果たすために必要な騎兵の特性が環境の変化により失われた例である。これまで述べてきたことから、筆者は機能部隊の廃止・改編を円滑に行うためには、部隊の特性をどう捉えるかが重要であると考え。馬が唯一の快速機動手段であった時期は、騎兵は自己を「馬に乗る兵種」と考えていればよかった。その後、火力が発達し、戦車や装甲車といった馬以外の機動手段が発達してきた時期には、「馬に乗る兵種」では時代の変化に対応できなくなった。騎兵が自己を「馬に乗る兵種」ではなく、もう一段高い次元で、「機動兵種」と認識することが、騎兵の廃止に必要だったと筆者は考える。

典令範や各種記事の文面を追うと、騎兵が大正期にはすでに機動力にアイデンティティを有していたことは確かに記載されているし、「機動戦闘兵種」という語を作ったことからそれは確認できる。しかし、これまで見てきた議論の推移から、筆者には各種の機動手段が発達してきた後も、騎兵が当初、馬をいくつかある機動手段の一つではなく、唯一の手段と考え、自らを「馬に乗る兵種」と捉えていたように見える。明確なきっかけは断言できないが、昭和10(1935)年頃から自らの特性の再解釈が行われ、「馬に乗る兵種を今後どうするか」という問いが「機動兵種としての戦闘力を発揮するためには今後どのようにすればよいか」という問いに

変化したように見える。この問いの変化こそが騎兵の円滑な廃止にとって重要であったと筆者は考える。

馬を所与のものとして、自らを「馬に乗る兵種」と捉える限り、その近代化に関する検討内容は、馬に対して機械をどう位置づけるか、乗馬戦や徒歩戦をどう行うかに終始してしまう。しかし、自らを「機動兵種」と捉えなおすことで、馬は機動の一手段となり、機械化を含む、馬以外の機動手段を採用することに対する心理的抵抗は低下し、戦闘方法の考察も新たな次元に変化する。利用し得る手段の幅が広がれば、果たせる役割も変化する。

これは騎兵の伝統の再解釈でもある。騎兵が乗馬による白兵襲撃を行い、主として搜索を担うという伝統を、機動と急襲による戦闘を行い、機動力を必要とする各種の役割を担うという伝統に捉えなおしたともいえるだろう。騎兵は自らの伝統を機甲でも通用する形に捉えなおしたのである。

おわりに

騎兵と戦車が統合されて機甲兵になったことで、なにがどう変わったのだろうか。機甲本部の設立後、1年も経ないうちに日本は対米英戦に突入している。騎兵の伝統は、より高次の次元で再解釈され、機甲兵種で発揮されることになった。緒戦では、例えばマレー作戦のように、機甲の理想を具現化したような戦闘も行われている。先に触れた吉田の意見で述べられていた機甲部隊は、従来の騎兵のような日本陸軍主力の補助的な部隊でも、戦車部隊のような歩兵の支援部隊でもない。機甲部隊は「其ノ偉大ナルカヲ以テ突破ノ先端ニ立チ或ハ包圍ノ外翼ニ進ミ或ハ敵ノ後方ヲ遮断スル等強力ナル空軍ト共ニ線ヨリ面ニ面ヨリ体ニ進ンデ居ル現代戦ノ骨幹トナルベキ<sup>110)</sup>」部隊である。その後には発布された機甲兵団用の典令範である昭和 17 (1942) 年版「機甲作戦要務書第二部」では「戦闘指揮 諸兵種ノ運用及協同」で「第二十二 諸兵種ノ共同ハ戦車ヲシテ其ノ目的ヲ達セシムルヲ主眼トシテ行ハルベキモノトス<sup>111)</sup>」とされている。昭和 13 (1938) 年版「作戦要務令」では歩兵主体という前提の上で戦車の独立的な運用が示されていたが、「機甲作戦要務書」における機甲作戦の主体は歩兵ではなく戦車になったという変化が見られる。

騎兵の役割はどの兵種や部隊に受け継がれたのか。搜索に関しては主として航空と分担することになった。その他の役割に関しては、「機甲作戦要務書」の搜索隊の記述を見てみると、「通常戦闘ノ終始ニ亘リ師団ノ主要ナル搜索状況ニ依リ所要ノ警戒ニ任ズ時トシテ敵ノ側背脅威、退路遮断、我ガ側背掩護等ノ任務ニ服シ又敵ニ先ダチ要点ヲ占領シ或ハ交通網ヲ破壊シテ敵ノ

<sup>110)</sup> 佐久間、平井編『日本騎兵史』下巻、361頁。

<sup>111)</sup> 参謀本部、教育総監部「機甲作戦要務書 第二部」(1942年)防衛研究所所蔵、12頁。

機動ヲ妨害スルコトアリ<sup>112</sup>」となっており、搜索隊に従来の騎兵の役割が継承されていることがわかる。ただし、ここに記載されている戦車師団の搜索隊は、名称こそノモンハン事件で大打撃をうけた騎兵部隊と同じだが、その内容は騎兵ではなく、軽戦車中隊 2 個、砲戦車（中戦車）中隊 1 個、機動歩兵中隊 1 個と整備中隊から成る歩戦連合の戦闘任務部隊<sup>113</sup>である。

日本の戦車の発展に対して元騎兵の人員が与えた影響に関する実証的な調査は本稿では行っていない。しかし、「機甲作戦要務書」を見る限り、その思想の中心には吉田の考えたような形での機甲作戦が具体化されていることがわかる。最終的に国力の問題等から全軍の機械化は達成されずに終戦と軍の解体を迎えることになるわけであるが、少なくとも昭和 16（1941）年に騎兵は機甲に変化することで、かつて有していた特性を発展的に再獲得する契機を得たのであった。

（参考資料）騎兵操典 綱領の推移

時 期	綱領の記述（役割、特性に関する部分のみ）
明治 45（1912）年版 騎兵操典	第一 騎兵ハ会戦前遠ク敵方ニ進出シ諸種ノ情報ヲ収集シ戦勝ノ基ヲ開カサルヘカラス此目的ヲ達スルニハ全カヲ尽シテ敵ノ騎兵ヲ撃破シ以テ行動ノ自由ヲ得ルコト緊要ナリ又会戦ニ方リテハ他兵種ト協同動作シ其終局ニ際シテハ猛烈ニ敵ヲ追撃シテ戦闘ノ効果ヲ偉大ナラシメ或ハ果敢ナル逆襲ヲ断行シテ友軍ノ戦勢ヲ挽回セサルヘカラス  第二 騎兵戦闘ノ主眼ハ乗馬戦ヲ以テ敵ヲ压倒殲滅スルニ在リ然レトモ状況之ニ適セサルトキハ徒歩戦ヲ用ヒ以テ戦闘ノ目的ヲ達セサルヘカラス
大正 11（1922）年版 騎兵操典草案	第一 騎兵ハ会戦ニ先シテ情報ノ収集、資源ノ獲得等ニ任シ以テ戦勝ノ基ヲ開カサルヘカラス之カヲ為敵ノ騎兵又ハ先遣部隊ヲ撃破スルコト緊要ナリ又会戦ニ方リテハ他兵種ト協同シテ其戦闘ヲ容易ニシ終局ニ際シテハ猛烈ニ敵ヲ追撃シテ戦闘ノ効果ヲ偉大ナラシメ或ハ果敢ナル逆襲ヲ断行シテ友軍ノ戦勢ヲ挽回セサルヘカラス  第二 騎兵ノ本領ハ快速ナル機動性ト独立セル戦闘能力トヲ以テ其任務ヲ達成スルニ在リ而シテ其戦闘目的ヲ達スル為乗馬戦又ハ徒歩戦ヲ用ヒ或ハ之ヲ併用ス

<sup>112</sup> 同上、15 頁。

<sup>113</sup> 萌黄会編「ヨーロッパの騎兵 日本の騎兵」⑨『偕行』484号（1991年4月）20頁。元戦車第三師団搜索隊戦友会編『戦車第三師団搜索隊史』（私家版、1984年）16-18頁。

## 樋口 日本陸軍における騎兵の役割の変化と継承

<p style="text-align: center;">大正 15 (1926) 年版 騎兵操典草案</p>	<p>第一 騎兵ハ会戦ニ先ンシ主トシテ情報ノ収集ニ任シ以テ戦勝ノ基ヲ開キ会戦ニ方リテハ他兵種ト協同シテ所属兵团ノ戦闘ヲ容易ニシ其終局ニ際シテハ猛烈ニ敵ヲ追撃シテ戦勝ノ効果ヲ偉大ナラシメ或ハ果敢ナル逆襲ヲ断行シテ友軍ノ戦勢ヲ挽回セサルヘカラス</p> <p>第二 騎兵ノ本領ハ快速ナル機動性ト独立セル戦闘能力トヲ以テ其任務ヲ達成スルニ在リ而シテ其戦闘目的ヲ達スル為乗馬戦又ハ徒歩戦ヲ用ヒ或ハ之ヲ併用ス</p>
<p style="text-align: center;">昭和 6 (1931) 年版 騎兵操典</p>	<p>第十一 騎兵ノ本領ハ独立セル戦闘能力ト快速ナル機動性トヲ以テ搜索、警戒、掩護、戦闘参加、追撃等全軍戦捷ノ為重要ナル任務ヲ達成スルニ在リ (中略) 巧ニ乗馬戦又ハ徒歩戦ヲ活用シ或ハ之ヲ併用シテ敵ヲ圧倒殲滅シ以テ其本領ヲ發揮スルヲ要ス</p>
<p style="text-align: center;">昭和 12 (1937) 年版 騎兵操典草案</p>	<p>第十一 騎兵ノ本領ハ独立セル戦闘力ト卓越セル機動力トヲ以テ搜索、戦闘参加、追撃等全軍戦捷ノ為重要ナル任務ヲ達成スルニ在リ (以下略、乗馬戦と徒歩戦に関する記述なし。)</p>

(筆者作成)